

みなとメディアミュージアム 2017 記録集



開催概要

みなとメディアミュージアム(以下、MMM)は、茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線を舞台に開催する現代アートプロジェクトです。Webなどを通して全国からアーティストを募集し、コンペティションののち出展者と作品を決定します。出展された作品は会期中(8,9月中、約3週間)、那珂湊の駅やまちなかを中心に、ひたちなか海浜鉄道沿線や車輦内にも展示されます。また、地域を対象としたアートワークショップの運営も行います。「産(那珂湊地区商店街、ひたちなか海浜鉄道湊線)+学(主に大学生、大学院生、大学教員)+芸(アーティスト)」の三者からなる実行委員会により運営されており、芸術表現と地域との協働によるまちの活性化を目的として活動しています。2009年に第一回を開催し、今年度で9回目の開催となりました。

日程：2017年8月12日(土)～9月3日(日) ※毎週月・火休み ※観覧料無料

開場時間：【平日】10：00～17：00 【土日祝】10：00～19：00

会場：茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線地域(ひたちなか海浜鉄道那珂湊駅周辺)

主催：みなとメディアミュージアム実行委員会

共催：宝塚大学東京メディア芸術学部、常磐大学

後援：ひたちなか市、ひたちなか市教育委員会、ひたちなか海浜鉄道株式会社、おらが湊鐵道応援団、
ひたちなか商工会議所

協力：東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

テーマ「対峙したあと」

まちとアート。

つくる人、うけとる人、ささえる人。

それぞれが向かい合った「あと」に、生まれてくるものは何か。

みなとメディアミュージアムにしかない、あたらしい「あと」があるかもしれない。

ここで生みだされる、さまざまなものたちが
対峙というきっかけを与えていく。

この夏、那珂湊に現れるものたちは
あなたに何を残していくのだろうか。

あなたは、何を残していくのだろうか。

INDEX

- 00 アートマップ
- 01 開催概要 / テーマ
- 02 INDEX
- 03 代表のことば

- 展示作品紹介
- 04 大賞
 - Sawa Yukio 《おのがすがたを うつしてやみん》
- 06 審査員特別賞
 - 石川遊雪 《継ぎの庭》
- 07 プロデューサー特別賞
 - Show Kawabata × Takuto Usami 《SEARCHING PHOTON》
- 08 ひたちなか海浜鉄道賞
 - 山口貴司・藤井僚佑 《記憶の解像度》
- 09 ドゥナイトマーケット実行委員会賞
 - 43 《BANKOKKI》
- 10 那珂湊焼きそば大学院賞
 - tsugu-mi 《in the roop》
- 11 みなとみらいプロジェクト実行委員会賞
 - 田中真帆 《あのひとら》《気持ちの良い風 / あなたのためにあけておいた穴》
- 12 那珂湊本町通り商店街振興組合賞
 - 水戸工業高校美術部 《わたしたちの宇宙とほくたちの銀河》
- 13 ひたちなか商工会議所那珂湊ブロック賞
 - 白田那智 《プラスチック プラクティス プロジェクト》
- 14 まちづくり3710実行委員会賞
 - 楽しいスケッチの会
- 15 おらが湊線鉄道応援団賞
 - おさむシアター
- 16 安田学園中学校・高等学校美術部 《ARTRAIN(アートレイン)》《ヒーリング・アートプロジェクト》
- 17 新井麻子 《海光》
- 18 絵手紙応援隊 《よみがえる ETEGAMI》
- 19 大谷陽一郎 《雨》
- 20 岡本晃樹 《痕跡地図(那珂湊)》
- 21 小山和則 《時の堆積》
- 22 佐瀬梓 《『手紙 -想いを守る-』
- 23 宝塚大学東京メディア芸術学部デザイン表現研究室 《ヘッドマークデザインワークショップ》
- 24 中村やす 《那珂湊はいいぞ! 2017》
- 25 柳詩郎 《After the quake》
- 26 特別展示
 - 慶應義塾大学加藤文俊研究室 《那珂湊の人びとのポスター展》
 - 株式会社 USEN 《僕は駅猫おさむ〜おさむの毎日〜》
- 27 伊藤沙織 《かっぱのきもち》《おひとつかが》

- 28 地域と連携したワークショップの取り組み
- 30 受賞者一覧 / 審査員総評
- 31 MMM9年のあゆみ
- 32 MMM2017に向けて

代表のこぼ

那珂湊とアートが大好きです。

縁もゆかりもなかったはずのものに惹かれ続けているんです。海と共にある街だからか、那珂湊には独特の魅力がある。アートはとてもおもしろい。那珂湊もアートもとても魅力的なんです。

「恩返しをしたい」というのが私にとってMMM2017の始まりです。いただきものばかりで何も返せていない、そんな想いをずっと持っていました。

わたしたちスタッフが新しい体制で想いを表すために最初に決めたのがMMM2017のテーマ、「対峙したあと」。

「地域」×「アート」で何ができるのかが私たちの課題でした。

「アートの力で那珂湊地域に貢献したい」「アートを手段にしてはならない」

二つの矛盾した思いを抱えながら、その二つの両立を目指してきました。

アートにはどうしても壁があるように感じていました。

富裕層の娯楽、美しい絵を描く技術、よく分からない個性の爆発。これはMMMに入る前に私が感じていたアートに対するイメージです。共感される方も多いのではないのでしょうか。美術館には誘われても行かないような生活でした。MMMを通して、アートは人の主張や想いを形にしたものだとなりました。今ではかなりの頻度で美術館に行きます。作家さんは言葉にならない主張を伝えるために試行錯誤して作品を創っているのだと私は思っています。

いつもお世話になっている那珂湊の皆さんにアートで何ができるのかたくさん悩みましたが、私は今アートの力の一つに「深い対話」があると考えています。

一つの主張をもとに深く思考できる可能性です。

MMMでは那珂湊を舞台にアート作品を展示します。作家さんは、那珂湊のひと・モノ・場所・歴史などと対峙し主張を残します。その主張と最も深い対話ができるのは、その街を誰よりもよく知っている那珂湊の皆さんだと思います。今年もまた「深い対話」ができて良かったなあ、新しい発見があったなあと思っていただけたら、それが一つのMMMを通しての恩返しになるかもしれません。

最後になりましたが、今一度地域の皆様、作家の皆様、アドバイザーの先生方、そして運営スタッフの皆さんに心よりお礼を申し上げます。今年もいただきものばかりでした。しかし、皆様の応援なくしてみなとメディアミュージアムは在りえません。これからも、私たちは何を返していけるか、残していけるか模索しながら前に進んでいきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

MMM2017代表 高田彩加



■ Sawa Yukio





おのがすがたを うつしてやみん

「対峙すること」は現地に来てみることで思った以上に多くあった。

そして案外、時の流れや状況に応じて流動的であるとも感じた。

那珂湊という土地のフィルターを通して私が対峙したもの。

最終的にそれは、自分自身であった。

当初私が想定していた明確なモチーフは、今となってはもはや外殻でしかない。

しかしその形状が、人々の心に内在しているそれぞれのイメージを想起させることができれば幸いである。

会期中も滞在し、現地に流れる時間の中であらゆる物事と対峙しながら、一つの完成に向けて制作を重ねてゆく。

それは日々向き合いながら増殖し、形を変えてゆくのであろう。

対峙したあとには、一体何が現れるのだろうか。

対峙した私は、どんな形を紡ぐだろう。

今、私はこの場所にただ、身を委ねたい。

※タイトルは「立ち向こう人の心は鏡なり 己が姿を移してや見ん」(黒住宗忠)という歌から一部拝借している。

profile

福島県出身

茨城大学教育学部情報文化課程アート文化コース卒業

石川遊雪



継ぎの庭

生活で使われていた陶器などを金継ぎの手法で再生し、その継ぎ目からは植物が芽生えている。床に並べられた陶器たちはその使われてきた記憶と寄り添いながら、ひとつの小さな庭となる。

profile

草月流華道家

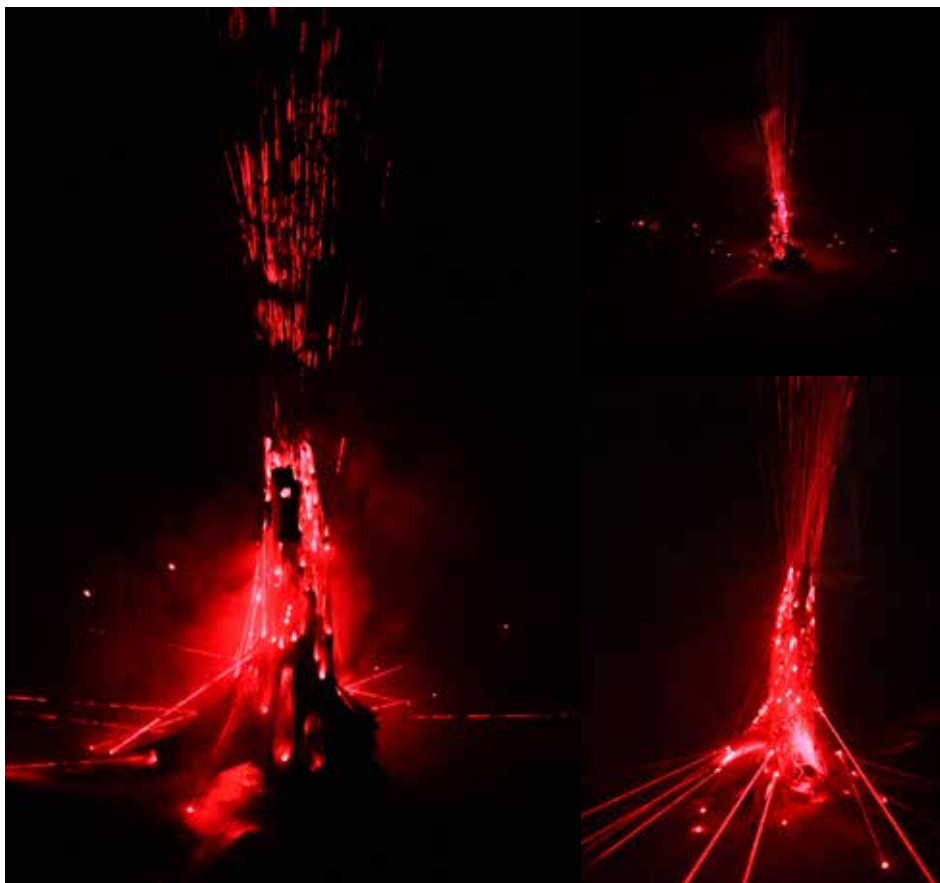
社会や都市の中の私たちの姿を生け花によって可視化する作品を制作している。

2015 TWS-emerging/TWS渋谷

2015渋谷のたまご/渋谷区総合庁舎

2017 IAG AWARDS 2017/東京芸術劇場

Show Kawabata x Takuto Usami



SEARCHING PHOTON

人は視錐体が光を感じるにより風景や物質などを認識しているが、テクノロジーは光の一部しか捉えられず、光を探し膨大な探索を試みている。

人は意識していない視点。

光の探索から生まれる知覚の世界から人はどのような解釈するのか？

profile

2016年より活動開始。

物質の存在や形態を認識している根源を使いなれた感覚から認識するのではなく、人から取りのぞかれていくものに存在感を与え、新たな知覚へ変容させ見慣れた日常、また身体のある方を再考し続けている。

2016年 3331α Art Hack Day 審査員賞

■ 山口貴司・藤井僚佑



記憶の解像度

駅には今日もあらゆる人が行き交い、さまざまな人のさまざまな感情がめまぐるしく対流している。初めて訪れる人の高揚感、車窓の風景に感じるノスタルジー、帰りがけの満足感と淋しさ、旅立つ人の哀愁、通勤通学の疲労と非日常への期待、好きな人に会うワクワク感。そんな感情を透かした先には、那珂湊の鮮やかな光景が見えてくる。対峙した瞬間鮮明に脳裏に焼き付いたはずの光景は、どうしても時間とともに解像度が低下していく。やがて光と色の集合となってぼんやりと脳裏に漂う。もう一度すくいとりたいけど、たどりつかないもどかしさ。人間の記憶の曖昧さ。このまちと「対峙したあと」に残る記憶は、忘却の時間に抗うように光と色を撒き散らしながら揺らめいている。

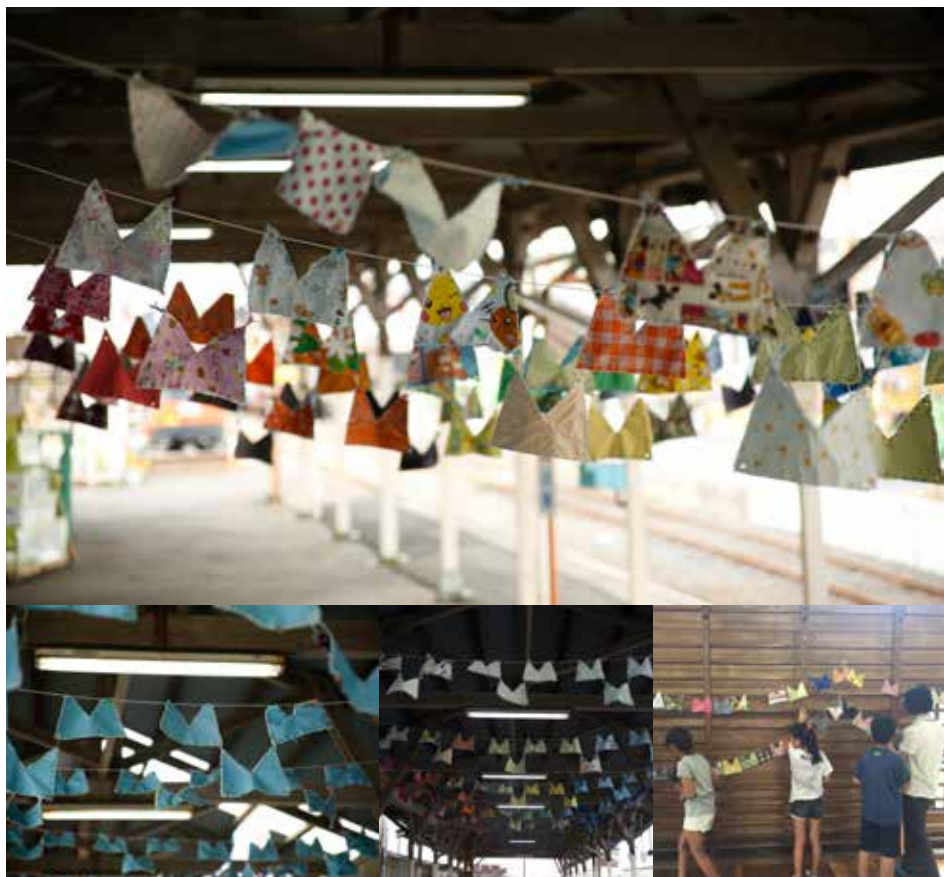
profile

山口 貴司(建築家)

藤井 僚佑(プランナー)

ともに1986年生まれ、2011年慶應義塾大学大学院理工学研究科修士過程修了。

建築設計を中心に、空間デザインやアート・インスタレーション制作などの活動を行っている。

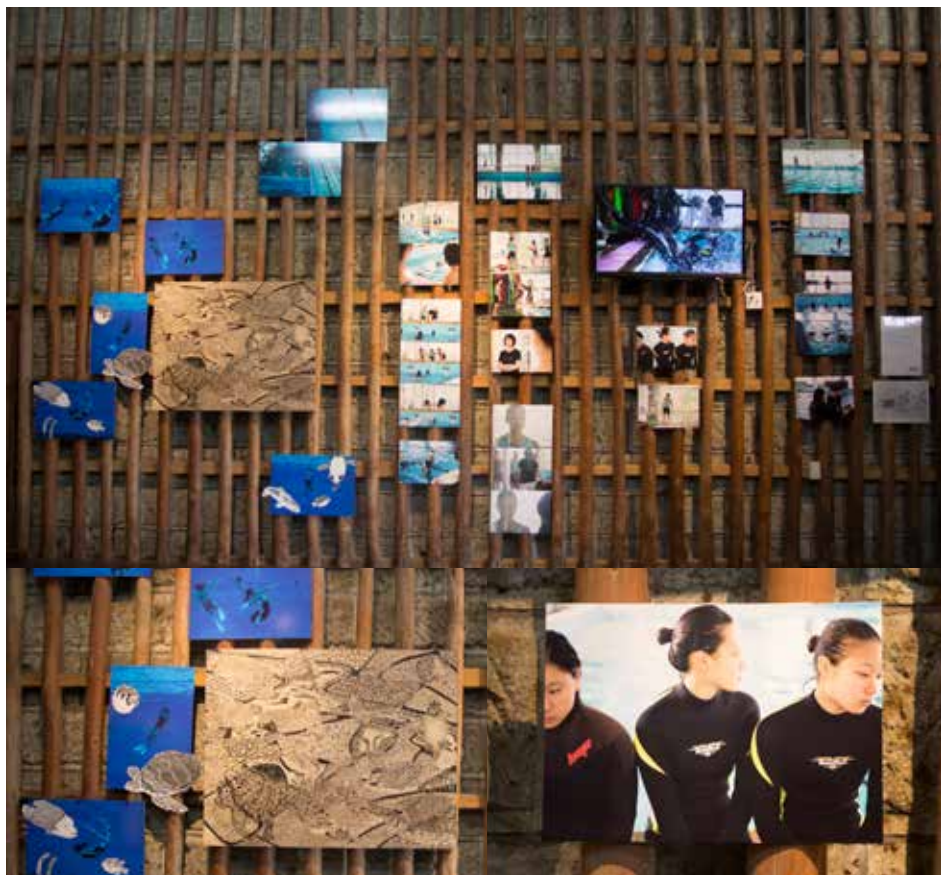


BANKOKKI

運動会とかで万国旗を見かけると、
 なんだかワイワイやっている雰囲気がある。
 様々な国旗が空にヒラヒラと舞う情景は 誰しもわくわくとした気持ちが思い出されるのではないだろうか。
 そんな万国旗のようなMMMの開催を表す目印を提案します。

profile

視点が変わったその先に在る『何か』。建築でもアート でも...その『何か』を私たちは探し作り出したい。



in the roop

逡巡し、それでも成長していく瞬間(対峙)を捉えようと試み撮影しました。
夢や希望は目には見えませんが、そんな想いを表現出来たらと思い平面作品を描きました。

profile

ストーリー写真/映画監督の諸江亮と、アーティストである長雪恵のユニット。

諸江亮 映画監督「死づえ」「アニと僕の夫婦喧嘩」| 写真家「10asia+Star JAPAN」| MVどぶろっく「やってはいけない」など

長雪恵 多摩美術大学造形表現学部造形学科油画専攻卒業

第12回岡本太郎現代芸術賞岡本敏子賞・SICF18 石田尚志賞 など

田中真帆



あのひとら

気持ちの良い風 / あなたのためにあけておいた穴

人と関係していくことについてずっと考えている。私たちは本来的にわかり合うことは出来ないのかもしれない。しかし、コミュニケーションの不可能性が生むのは断絶ではなく、相手をわかろうとすること、受け入れられ、受け入れること、離れること、寄り添うこと、その継続だ。

人との関係の形は、そのようにして人々が対峙した痕跡のように思う。そして、粘土の形もまた、そういったやりとりの痕跡のもとで生まれる。

那珂湊は初めて訪れた場所なもののだから、はじめはこの土地に作品を置くイメージを掴むことが出来なかった。土地と私を繋ぐものが必要だと思い「気持ちの良い風 / あなたのためにあけておいた穴」を作った。湊公園は高台にあって海や町がよく見える。夏の暑い日でも風通しが良く、よく手入れされた古い家のような心地良さがある。時々犬の散歩にやってくる人がいるけど大抵は静かで、公園そのものが大らかに昼寝しているようだ。ここを訪れる馴染みの人にとって、私の作品は突然現れた妖怪のような感じかもしれない。でも気の良い妖怪だから、一緒に一休みできたらいいと思う。

profile

2017年 女子美術大学 芸術学部

デザイン・工芸学科 工芸専攻 陶芸コース 修了

水戸工業高校美術部



わたしたちの宇宙とぼくたちの銀河

この作品では、宇宙に存在する無数の銀河をカラフルな色の布地、紙バンド、マップピン、フルカラーLED等を使用し、神秘的な宇宙、銀河(中心部はブラックホールをイメージ)を表現することを目指して制作しました。また、MIT(アメリカ・マサチューセッツ工科大学)メディア・ラボのリア・ビクリー教授によって開発されたLilypad Arduino(リリーパッド アルデュイーノ)という円形の超小型コンピュータを使用しました。このコンピュータは服や帽子、手袋等に取り付けられるウェアラブル(着用可能)なデバイス(装置)であり、機能的だけでなくデザイン性にも優れているので、今回の作品のLEDを制御するのに使用し、作品の一部として取り入れました。

profile

今年度は、14名の部員が所属しています。少しでも、地域のイベントに参加したいと考え応募しました。昨年度は、地元商工会の顔出し看板のCG制作に取り組み、現在その作品は各店頭に設置されています。また、今夏には文化部の全国大会で部員の制作した作品が県代表作品として、宮城県美術館に展示されました。

白田那智



プラスチック プラクティス プロジェクト

茨城県ひたちなか市那珂湊地区でのアートプロジェクトです。

那珂湊の伝統的な八朔祭りの風流物である屋台(山車)をモチーフに、子ども屋台部隊を発足。

湊に来る大学生、湊の高校生、中学生、小学生、未就学児童たちが子ども屋台をきっかけに出会い、変化し、私たち大人にたくさんのことを教えてくれます。

そんな一夏の記録から、このプロジェクトは始まります。

profile

1991年生まれ 東京都出身

2014年 武蔵野美術大学日本画学科卒業

現在ひたちなか市那珂湊地区を拠点に活動を行う。

主にその場所での人やものとの出会いを強く意識した制作を行う。那珂湊を始め、あらゆる地域と連携し、人を巻き込み未確定に進めていくアートプロジェクトを仕掛ける。

楽しいスケッチの会



楽しいスケッチの会

12年前にスケッチが描けない仲間が菊地先生に出会い、1回/月指導を受けています。

現在は23名と大人数になり、益々、元気に生き生きしています。

MMMに合わせ那珂湊で印象に残った場所を描き上げました。

現地でのスケッチ終了時には先生から上手く描くコツを伝授して貰います。

おさむシアター

おさむシアターとは

「ケハ601」は、1960年新潟鉄工製のステンレス気動車。そのレトロ車両が映画館に大変身！中には列車の座席に座って映画の旅を楽しめる唯一無二の空間が広がっています。モチーフは湊線の駅猫「おさむ」から。

協力：東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻



here AND there



小光

1993年生まれ。2016年多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。2017年現在、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在籍中。

すみっこのこ



浅野陽子

1993年福岡県に生まれ、関西で育つ。2015年神戸大学発達科学部人間表現学科卒業。2017年現在、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在籍中。

RINGING CITY



今津良樹

1985年浜松生まれ。2009年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。2017年現在、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在籍中。

That's why they were made



佐藤桂

仙台市出身。2015年宮城教育大学教育学部初等教育教員養成課程美術コース卒業。2017年現在、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在籍中。

SUMMER TIME



福地明乃

2016年沖縄県立芸術大学卒。東京芸術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に在学中。

Z



瀬尾宙

1987年生まれ。2011年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。2017年東京芸術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。

■ 安田学園中学校・高等学校美術部



ARTRAIN(アートレイン)

対峙というテーマを出会いの場と捉え、ひたちなか海浜鉄道沿線に所縁のある風景と人が出会う場所をイメージしました。具体的には、神社や商店街といった場所や、駅の標識や植物などありふれたものの中にも人との関わりが感じられるものです。また、作品と車窓から見える風景、乗車した人が出会いを感じられるよう、絵の具の使い方を工夫しました。スパッタリングで色を重ねたり、スポンジやローラーを使用したり、筆以外の様々な絵画技法を取り入れることで作品と窓の風景が重なり合うような表現を目指しました。

ヒーリング・アートプロジェクト

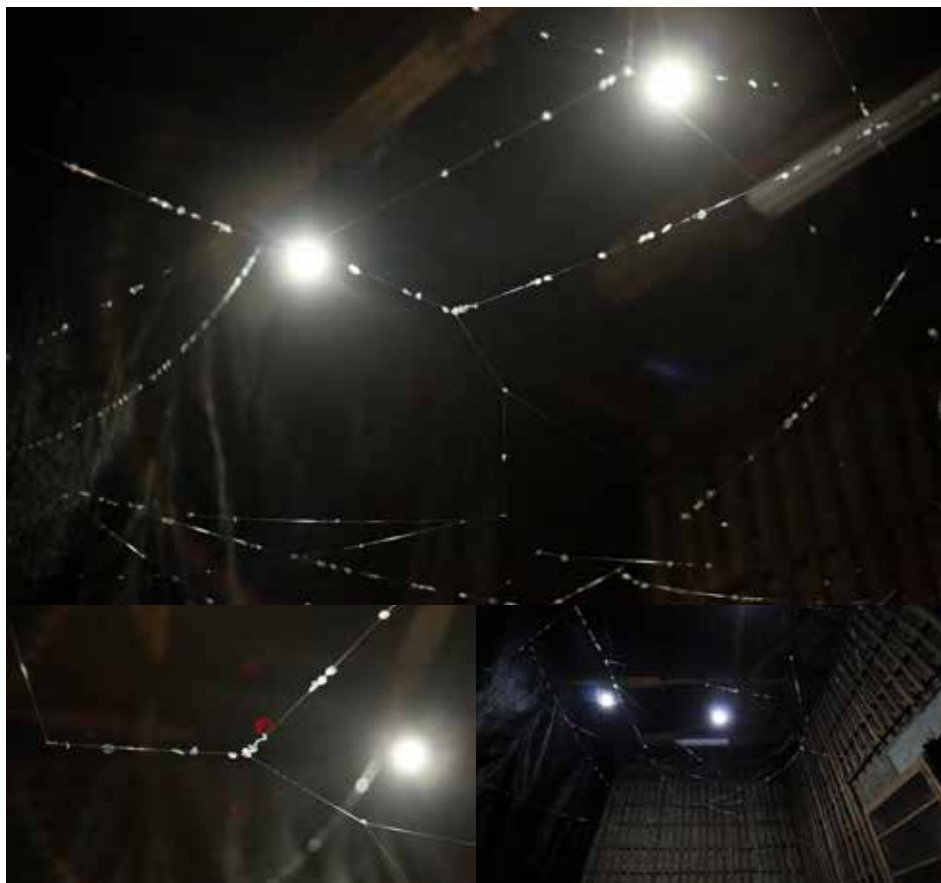
ヒーリング・アートとは、爽やかな気分になって、心が落ち着く効果を目的とした芸術を意味しています。医療空間や福祉施設での展示は、無機質で冷たい印象をもたれやすい空間を、華やかにすることで患者さんのストレスを緩和する役割を担っています。

私たちは、動物や植物、抽象的な模様を温かみのある淡い色調で描くことで、リハビリ施設が明るく開放的なイメージになるように心がけました。また、自然光によって床におちる影の模様は、可愛らしさを演出しています。

profile

2015年 みなとメディアミュージアム ひたちなか海浜鉄道賞 受賞

■ 新井麻子



海光

海辺の街である那珂湊で、海の中にあるような空間をつくりたいと思った。魚の鱗のような小さなパーツが連なることで、魚群のような、海のような場になる。光を消すと発光し、深海のような空間へと変化する。様々な面を持つ海を、光と闇によって表現する。

profile

1994年兵庫県生まれ

光が空間に与える魅力について研究中。

絵手紙応援隊



よみがえる ETEGAMI

私たちは2013年から活動している絵手紙愛好者のグループです。

毎年 湊線を取り巻く状況に合わせてキャッチフレーズを決め、全国から応援絵手紙を募集します。集まった物を約3か月車内に展示して頂き、秋には一堂に集めギャラリー展を行っています。今までに子どもや海外の方の参加もありました。現在の湊線には、第5回の絵手紙列車が走っています。

MMM2017には、4回までの応援絵手紙およそ1,000枚を展示しています。

storyは平磯海岸の中生代の岩陰から、絵手紙をまとった恐竜が現れ、駅にばらまいていく・・・そんな設定で企画しました。個々のメッセージはもちろんですが、全体のマスで受け止め 体感してくださる事を望みます。

海からの風で動く絵手紙は、見る人の心へそよそよと働きかけをしています。

あなたにどんな声が届くでしょうか？

大谷陽一郎



雨

生んでは無にし、無にしては生む。古来より先人たちは雨に対して畏怖の念を抱いた。雨が降り、作物が育てば家族を食べさせることができる。一方で作物を腐らせ、さらには洪水となり住処を洗いさっていく。人々は雨乞いをし、太陽を求め、天に祈った。雨が降ることで人間の生が保証されていることは今も昔も変わらない。そのイメージを漢字を経由しながら探っていく。

profile

1990年大阪生まれ 2015年桑沢デザイン研究所卒業

現在、東京藝術大学大学院美術研究科在籍

JAGDA学生グランプリ2015グランプリ、台湾国際学生デザインコンペ2016ビジュアルデザイン部門銅賞、

IAG AWARD

2017奨励賞受賞。『雨 大谷陽一郎 作品集』（リトルモア）刊行

岡本晃樹



痕跡地図（那珂湊）

「そこにあることが忘れられてしまっているものたち」
もう使われていないんだけど、確かにそれを作った・使った人がかつてそこにいて、そこに生きていたという痕跡。
「ああ、そういえば君、そんなとこに居たね」って感じの静かな奴ら。
「なんでそんなとこ居たんだっけ？」って気づくといつもの風景がちよっと変わって見える。
知っていた。君がそこにいることは。でも、知らなかった。君がそんな顔をしていたことは。
きっと彼らはこれからもそこに黙って座り続けているんだと思う。
もしかしたらいつか出土して、大真面目に当時の生活を考察されたりするんだろうか。
そう考えると頑張ってるなあ、とも愛おしくなったりします。
痕跡たち。

profile

2007年7月 ジャグリング国際大会IJA ジュニア部門3位
2009年8月 北米周遊公演ShooboxTour ゲスト出演
2016年5月 単独公演LOSTSCAPE主催
2017年4月 筑波大学人間総合科学研究科に所属

小山和則



「時の堆積」(ときのたいせき)

橿原神宮の歴史は古く、和銅年中(708-715年)の創建といわれています。そして、この地に遷ったのは寛文12年(1672年)、今から345年前とのことです。

長年にわたる多くの人々の参詣の歴史により削られた石段路面の凹凸に、現在に至るまでの300年以上の時の重みを感じます。過ぎ去った「時の堆積」は、石段路面の摩耗度に現れています。水を湛えた竹と石段との隙間に太陽光が差し込み、竹に反射する光の量に応じて、過ぎ去った時の量が表現されます。

この参道の一画は、今後、都市計画道路の影響を受けるようです。新たな都市計画により、街の交通はより便利になりますが、人々によって刻まれた「街の記憶」を伝承していくものたちは、変わっていかざるを得ません。この作品が、これからの「街づくり」について、何かを考えるきっかけとなれば幸いです。

「時の堆積」と対峙したあとに、生まれてくるものは何でしょうか。

profile

千葉県出身。早稲田大学理工学部建築学科卒業。「場の魅力」をテーマに各地でインスタレーションを制作。

2006 国民文化祭・やまぐち2006「光と木・竹の造形展」

2011 六甲ミーツ・アート「芸術散歩2011」

2014 木津川アート2014

2016 みなとメディアミュージアム2016

佐瀬梓



『手紙 - 想いを守る -』

今の時代、携帯電話が普及し簡単に連絡し合えるようになり、手書きで手紙を送り合うという事は少なくなった。

けれど、綴った手紙に込められた想いは電子メールやSNSなどより重く、強く、相手へ届く。

それはきっと、想いの込められた手紙に宿りその想いを守り届ける存在がいるからではないだろうか。

profile

2014～ 「鍛金展」 天王洲セントラルタワーアートホール
2017 東京芸術大学卒業作品展
2017 東京芸術大学美術学部鍛金専攻 卒業
現在、同大学大学院修士1年在籍
2017 安宅賞 受賞



ヘッドマークデザインワークショップ

那珂湊第一小学校ワークショップにて4年生を対象に、木材合板とカラーフェルトを用いて立体的に制作する、ヘッドマークデザインワークショップを実施します。制作されたヘッドマークは、ひたちなか海浜鉄道の協力により、ワークショップ終了後と、今年の夏に開催されるMMM2017の期間中、営業列車に取り付けて走行します。



那珂湊はいいぞ！2017

2016年のワークショップ形式ではなく、テーマそのものである「那珂湊はいいぞ！」という言葉をストックに表現した。MMM開催期間中那珂湊の商店街に延々と同じフラッグがはためき、しつこいくらいに「那珂湊はいいぞ！」と訴えかける。

なお、作者はガルパンおじさんである。「ガールズ&パンツァー」は隣町大洗が舞台じゃないかとおっしゃるかもしれないが、登場キャラクターにはひたちなか市出身という設定のキャラクターも複数存在するので関係ないわけではない。

ガルパンはいいぞ。

profile

大阪生まれ

筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修了

常盤大学人間科学部コミュニケーション学科准教授

現代美術家

近年はワークショップを中心とした創作・プロデュース活動に移行しつつある。

柳詩郎



After the quake

ひたちなか市の海岸に漂流した流木や石。
それは東日本大震災によって引き起こされた津波の爪痕といえるものかもしれない。
それらを拾い集め、ひたすらに積み重ねていくと一つの形ができた。
頼りなく、それでもひたすらに積み重ね続ける。

profile

1987年 茨城県生まれ

2009年 茨城大学教育学部教員養成課程学校美術選修卒業

木や石、鉄など様々な素材を組み合わせた立体作品を制作している。

慶應義塾大学加藤文俊研究室

那珂湊の人びとのポスター展

ぼくたちは、旅先から、さまざまな「おみやげ」を持ち帰ろうとする。帰ってから、家族や友人たちと「おみやげ」を分かち合いながら、旅の思い出をふり返る。こうしてぼくたちは、少しずつ、まちのファンになってゆく。

だが、大切なのは「おみやげ」を持ち帰ることだけではない。ぼくたちには、まちに「足あと」を残しておきたいという欲求があるのだ。まちへの感謝の気持ちを込めて、まちに「何か」を還すことはできないのだろうか。そんな想いで、8年ほど前から、ポスターをつくる活動をスタートさせた。ポスターは、ぼくたちの気持ちをまちに還す「おきみやげ」ともいべきものだ。

ポスターは不思議なメディアだ。写真を大きく引き伸ばし、ことばを添えただけでも見える。でも、なぜかポスターのなかの人に会いたくなる。まちを歩いてみたくなる。ポスターを置いて帰れば、それは再びまちを訪れる理由にもなる。ポスターづくりは、慌ただしい。学生たちはベアになって取材に出かけ、わずかに数時間の取材を終えると、すぐにポスターづくりに取りかかる。ひとりで晩で仕上げて、翌日の朝にはポスターが完成する。今回は6月23日から25日にかけて那珂湊を訪ね、8枚のポスターをつくった。暮らしの現場では、誰もが、かっこいい。誰もが、輝く笑顔を見せる。ぼくたちは、さらに熱烈なファンになるのだ。



株式会社 USEN

僕は駅猫おさむ〜おさむの毎日〜

USEN コンテンツプロデュース統括部 制作部に所属するクリエイターメンバー。数々の企業店内放送コンテンツを手掛け、日々、「お客様が望んでいる音(コンテンツ)って何だろう?」を考えています。そんなメンバーが対峙した今回のお相手は、お客様ではなく「猫」。

ある日、那珂湊駅で、ある一匹の猫と出会い、猫の目線になって、猫の気持ちになったら、こんな温かい1曲ができあがりました。

<https://youtu.be/mSRRpF2MkQ8>



伊藤沙織

かっぱのきもち

おひとついかが

ちょっと上を向いて、ただ座っているだけの河童。
「何を見ているの？」と目を覗いて聞いてみる。
目の前を通り行く人を見送っているのか、空に浮かぶ雲の行方を見送っているのか。
誰かが来るのを待っているのか、雨が降るのを待っているのか…。
答えてはくれないけれど『となり、あいてるよ』とでも言いたそう。
ひとりでは一っと座っているのも好きだけど、いつ誰が隣に来てても良いように、いつでも隣を空けてちょこんと座っている。
河童の見つめる先には何があるのか。何を感じ、何を考えそこに座っているのか。そんなことを想像しながら見てほしい作品です。
ぜひ隣に座ってそこに流れる時間を一緒に感じてみてください。
この作品を見た人がちょっと笑ってしまったり、優しい気持ちになれたらいいなと思いながら制作しました。

profile

多摩美術大学 美術学部 工芸学科 金属専攻 卒業



地域と連携したワークショップの取り組み

MMM のワークショップ活動

MMMでは、アーティストや学生を中心としたワークショップ活動も多数実施しています。2017年現在、ひたちなか市内には大規模な美術館やアートスペースは残念ながらありません。子どもたちにとっては、美術に積極的に触れる機会が少ないのが現状です。そこでMMMは、市内の児童に美術に親しんでもらうことを目的としてワークショップ活動に注力しています。市内の高校生と共同でワークショップを実施することもあり、アーティストと子どもたち、スタッフがともに作品を作り上げる場としても機能しています。難しいという印象を持たれがちなアートの分野ですが、自ら制作に関わることでそのハードルを下げることに繋がればと考えています。

常磐大学のM4(みなとメディアミュージアム水戸)は通年で活動しており、那珂湊の商店街で行われるドーナイトマーケットや県内美術館で、児童向けのワークショップを実施しています。

今年度は例年に比べアーティスト中心のワークショップ活動が豊富であり、累計約350名(那珂湊第一、第二、第三小学校児童の約38%)に対してワークショップに関わる機会を提供できました。ご協力いただいた中高を含む市内各校の皆様はこの場を借りて心より御礼申し上げます。



那珂湊第一小学校ワークショップ

2015年度から始まった那珂湊第一小学校でのアートワークショップ活動も2017年度で3回目の開催となりました。初年度からこれまで、累計約300名の児童に作品制作の体験を積んでもらうことができました。学生スタッフ主体で企画がスタートし、今年度も43、宝塚大学東京メディア芸術学部デザイン表現研究室の協力により、より完成度の高い作品を、児童、アーティスト、スタッフの協力で作り上げることができました。

こうした経験が、この街で暮らす子供たちの考える力、つくる力を育むことにつながることを願っています。

活動の継続をあたかく支援してくださった、那珂湊第一小学校の児童のみなさん、保護者の皆様、先生方に御礼申し上げます。

今年度はワークショップ体験後、実際に会場に来た児童の数を計測しました。18%の児童が、ワークショップ作品を見に来場したことがわかりました。こうした数値指標も参考に、今後のプロジェクトの改善につなげていきたいと考えています。



白田那智

MMM2016にもアーティストとして参加した白田那智は、今年度さらに活動の幅を広げ、多くの学校でのワークショップ活動を実施。市内の多くの子供たち、住民を巻き込みながら作品制作を行っていきました。

関わった市内の学校は、海洋高校、那珂湊高校、那珂湊中学校、那珂湊第一、第二、第三小学校など。特に高校生の参加者はワークショップの運営にも積極的にに関わり、地域の交流の場づくりに貢献してくれました。

運営にも多くの学校児童、関係者とともに飾りつけ、作り上げた「屋台」は、八朔祭りやひたちなか祭りで展示されました。このワークショップは、八朔祭りで屋台を出すことのない新しい地域の子どもたちが、その伝統に触れる機会にもなったようです。

総計200人以上が関わって出来上がった屋台に、実際の八朔祭りに加わる屋台同様にお布施をくださった住民の方もあり、地域とつながった作品・活動であったと言えるかもしれません。



Sawa Yukio

今年度の大賞作家、Sawa Yukioによるワークショップ活動です。「ほくらのクラスのモンスター」をテーマに、流木を複数組み合わせせて、みんなで生き物やモンスターを作ってみるという内容。できあがったものの特徴を見出して、名前をつけることまで達成できました。

Sawa Yukioはひたちなか市沿岸の流木を用いて巨大な作品を制作しました。その流木を再利用しMMM会期後に行われたのが今回のワークショップです。対象となった那珂湊第一、第三小学校の子供たちは、みな楽しそうに取り組んでおり、またやりたいという声も多く寄せられました。



受賞者一覧

■大賞

Sawa Yukio

《おのがすがたを うつつてやみん》

選評

線を使った表現が、作家がこれまで取り組んできたテーマであったといえるが、今回は流木を組み上げ、巨大な彫刻ともいべき作品になった。白く塗った流木群は、様々な場所から見てみることで姿を自由自在に変えてゆく。空間を自由に使って作品の見え方を変える手法は作家の得意とするところで、本作でもその特徴がよく表れている。限られた時間のなかで質の高いものをつくっていくことが今後求められることになるだろうが、次の展開に期待ができる作品で、一層の活躍を望んでいる。近隣の方々と協力関係を築きながら作品を作り上げたプロセスについても、「地域との協働」というみなとメディアミュージアムの理念から評価できる点であり、作品そのものの評価とともに、大賞としてふさわしい作品であると判断した。

■審査員特別賞

石川遼雪

《継ぎの庭》

選評

金継ぎという、本来陶磁器の修復に用いる技術を作品に取り込んだもので、近年作家が制作しているシリーズであり、今回は場所に合わせて作品を多数配置し「庭」をつくるというものであった。器に宿る生活の記憶を、修復する行為によって探りつつ、さらにその修復跡から芽生える花で新たな風景をつくるという意欲的な作品である。発想が独創的であり、ひとつひとつの作品に見ええがあったが、空間としてやや散漫な印象があった。作品に集中できるようにインスタレーションを工夫する余地はあったのではないかな。当初の優れた発想を大事にして、躍動感を生かした隙のない作品制作を続けてほしい。

■プロデューサー特別賞

Show Kawabata x Takuto Usami

《SEARCHING PHOTON》

■ひたちなか商工会議所那珂湊ブロック賞

白田那智

《プラスチック プラクティス プロジェクト》

■ひたちなか海浜鉄道賞

山口貴司・藤井僚佑

《記憶の解像度》

■おらが湊鐵道応援団賞

おさむシアター

■まちづくり3710実行委員会賞

楽しいスケッチの会

■ドーナイトマーケット実行委員会賞

43

《BANKOKKI》

■那珂湊焼きそば大学院賞

tsugu-mi

《in the roop》

■みなとみらいプロジェクト実行委員会賞

田中真帆

《あのひとら・気持ちの良い風/
あなたのためにあけておいた穴》

■那珂湊本町通り商店街振興組合賞

水戸工業高校美術部

《わたしたちの宇宙とほくたちの銀河》

審査員総評

難しい条件のなか、様々な困難を乗り越えて作品の制作を続けてきたそれぞれの参加作家に、まずは敬意を表したいと思います。

空間を工夫して自分の思いのままに使っていくこと。これは昨年の審査でも指摘されていた課題でした。この度審査員として全体を見たときに、引き続きこの課題が重要な要素であることがわかりました。そして、その課題をうまくクリアできたかどうかで、作品の評価が分かれていきました。場所に取材しつつ、なおかつその場所に萎縮しない。この両方のバランスが取れていることが大事であり、そういった誠実かつしなやかな作品を特に評価する気持ちで、審査に臨みました。その点、Sawa Yukio氏の作品は、場所と空間を自身の表現にうまく取り込んでおり、大賞として申し分ないといえます。作品に対する誠実さはそれぞれの作家から感じられたので、気持ちよく審査に臨むことができたことを、ここに付記しておきたいと思います。あとは、取材した成果をもとに、作品の訴求力を高めていくことが肝腎であり、これは全体に共通する引き続きの課題といえます。今後のさらなる展開を期待しています。

特別審査員

亀海史明

東京藝術大学大学美術館 学芸員

MMM 9年の歩み

みなとメディアミュージアムは、2009年にアートと地域にそれぞれ関わる二人の学生が、廃線の危機を脱した直後のひたちなか海滨鉄道に話を持ちかけたところから始まった。那珂湊駅周辺中心での作品展示から、年を重ね徐々に活動の場を広げ、街中に浸透していった。MMMは「地域を伝えるメディア」として位置づけ、アート作品が街を彩り、形を為していった。

2010年からは作品公募を開始した。玉田多紀氏の作品『よみがえる海竜展』は、海の家における制作過程に多くの地域住民が関わり、海の家は展示後に地元NPOによりリノベーションされ、まちなかで活用された。

2011年の東日本大震災では多くの地域が被害に見舞われた。那珂湊も大きな被害を受けた。開催も危ぶまれたが、ひたちなか海滨鉄道・吉田社長の「来てください」という声によって活動を繋ぐことができた。震災復興と、那珂湊に活力を、の想いを抱き活動した。コンペティション制度はこの年より開始し、大賞の井口雄介氏による木を素材としたインスタレーション作品『CUBE SCAPe』は展示会期後、海岸で展示物をお焚き上げし、鎮魂の意を表した。

2012年にはMMMのこれまでの展示をきっかけに那珂湊駅横の市民スペース「百華蔵」が活用され始め、以降のMMMの展示会場の中心となった。また、学生が中心となって実行した街中でのワークショップ企画は、常磐大学の団体M4が中心となり、那珂湊で毎月開催されるドゥナイトマーケットにおいて現在も欠かさず実施される那珂湊に欠かせないものとなった。また、学生が運営する「みなとカフェ」は展示の休憩所・展示場所として期間中オープンした。現在ではMMM2015大賞作家の田中彰氏がカフェの運営を行いつつアトリエとして活用している。

2013年、「みなとハウス」という宿泊施設でのスタッフとアーティストの共同滞在がスタートし、アーティスト・イン・レジデンスの試みも行っている。

2014年には、野村在氏の『Broken Gallery』が地元の祭りの中で披露され、作品やイベントによる地域の接点が生れた。

2015年からは那珂湊第一小学校でのワークショップ企画がスタートし、子どもたちとアーティストがともに作った作品が街中に展示された。ワークショップでの子どもたちの笑顔や交流は作家・スタッフにも大きな力を与えている。また前述の田中彰氏の作品『Through pillar "Nakaminato"』は、東日本大震災において被災した那珂湊の懐古館の大黒柱を那珂湊駅ホームに再生し、その柱に制作され、現在でも観ることができる。MMM初年度作品の駅名標のグッドデザイン賞受賞やひたちなか市産業交流フェアへの参加、いばらきイメージアップ大賞受賞、茨城デザインセレクション選定などにより、より密接な地域との連携も実現している。

2016年に大賞を受賞した後藤宙氏の作品『構造の表象』は、百華蔵の空間と対峙した渾身の作品となった。さらに、『プラスチック プラクティス』を制作した白田那智氏は長期間に渡る滞在制作を行い作品とともにワークショップも開催した。さらに会期後に那珂湊へ移住し、本年度の活動も実施した。また作家の地域滞在や交流を経て制作された作品が多く公開された。木内裕子氏の『那珂湊松物語』、山本大樹氏の『episode』、ツチ屋サユリ氏の『き、こえ。ないのは誰か。』には実際に作品の一部として地元住民が登場する。那珂湊の方には作品だけでなく、様々な形で協働、交流を重ねている。



MMM2018 に向けて

2018年、みなとメディアミュージアムは10回目の開催となります。9年前に突然那珂湊にきたアーティストと学生たちは「よそのもの」として見えていたでしょう。それから9年間、夏的那珂湊には青いTシャツのスタッフがいることが定番となり、少しずつ活動も浸透してきたように思います。

しかし、この9年(私が関わってから4年)で様々なことが変化しています。MMMが関わらせてもらっている活動も増えました。那珂湊第一小学校やひたちなか市の産業交流フェアなどでもアーティストと制作を通じて、多くの対峙が生まれました。また、私たちMMMのスタッフも変化しています。常に18歳の新加入のスタッフがいる私たち(多くのスタッフは大学生、つまり18~22歳の世代です)は、時代の変化を否認無しに反映します。それは社会に対する変化や不安に対する反応だとも考えます。

アートで那珂湊と対峙することとはなんだろう。もちろん作品だけがあればいいということではないと考えます。作品と観る自分との対峙、誰にもおびやかされない体験は、美術館のほうが向いているかもしれません。MMMが那珂湊で実践したいことは、様々な場所から大学生とアーティストが那珂湊に集まり、那珂湊の方々と話をして、那珂湊のご飯を食べ、観てくれるひとに届くように制作をして、多くの要素が行き交う先に新しいものを産みたいということです。

アートは、特に現代アートはただ美しいものではなく、同時代を生きるアーティストが創り出した作品を鑑賞や体験することで、ものの見方や視点、あるいは思考を深めるものだと私は考えます。近年食や物質として残らない作品もアートと言われることもここに起因するかもしれません。

視点や思考が深まることで、生活を営む社会との対峙の仕方も異なるかもしれません。また、普段の日常の景色が変わって見えるかもしれません。そんな経験をともにできればと考えながら動いてきました。

形にならないものもアートと言いましたが、来年のMMMがそう変化するわけではありません。来年はMMMの10周年です。これまでつながってきたひととの絆を積み重ね、さらに新しい景色をみせることが目的です。毎年楽しみにしていたらいる方々にも、昔訪れたけれど、最近行っていないという那珂湊ロスを感じるとともに、これまでの10年と現在をみせる機会としたいです。その先は、これからの社会の変化とともに、また形を変えることもあるでしょう。それでも大学生というこれからの人材が一気に成長する場であり続けたいと思います。

もちろんこれを読んでいただいている貴方もいつでもお待ちしております。夏の日と一緒に青いTシャツを着て、作品制作をともにすることも、那珂湊で多くのひとと対峙することも、すべてみなさんと創りあげていきたいです。

MMM2017チーフキュレーター 橋口静思



MMM メンバー

代表	高田彩加	慶應義塾大学在学
副代表	村尾健司	常磐大学在学
副代表	竹田千晃	慶應義塾大学在学
副代表	佐々木芽衣	慶應義塾大学在学
プロデューサー	中村泰之	常磐大学人間科学部准教授
チーフキュレーター	橋口静思	宝塚大学東京メディア芸術学部助教・明治学院大学非常勤講師
アートディレクター	塙佳憲	慶應義塾大学在学
アドバイザー	小佐原孝幸	常磐大学・千葉商科大学非常勤講師
アドバイザー	田島悠史	宝塚大学専任講師
アドバイザー	草野正志	常磐大学卒業
デザインアドバイザー	渡邊哲意	宝塚大学東京メディア芸術学部准教授

学生メンバー

慶應義塾大学

浅野嶺 / 石田剛 / 小林颯 / 則竹桃実 / 伴野綾 / 比留川路乃 / 金子晴菜 / 日下真央 / 佐野虎太郎 / 寺崎幸季 / 鷺見達也 / 屈田琳 / 西村すみれ / 高島秀二郎 / 田島颯 / 菅原彩華 / 狩谷笑海 / 金谷莉沙

常磐大学

原田穂乃 / 角田華香 / 山田彩加 / 長谷川実希 / 稲見彩花 / 斎藤俊輔 / 西山紗友理

宝塚大学 長谷響美 / 秋田晴菜 / ドイエーリン / 久保田理世

茨城大学 伊藤真帆 / 野原緋奈子

明治大学 鈴木麻祐子

明治学院大学 山田萌結

千葉商科大学 佐野拓海

常磐大学サークルM4

海洋高校水産クラブ

社会人メンバー

緒方伊久磨 慶應義塾大学大学院修了
岡田佑亮 慶應義塾大学卒業
笹島亮太 常磐大学卒業
吉田千秋 ひたちなか海浜鉄道株式会社取締役社長
伊藤敦之 ひたちなか商工会議所
打越謙治 ひたちなか商工会議所
佐藤彦三郎 おらが湊鐵道応援団長
星秀憲 おらが湊鐵道応援団
船越知弘 おらが湊鐵道応援団
川崎達也 かわさきクリーニング
窪田弘実 関東鉄道
横須賀靖 横信建材工業株式会社
上田良隆 ビルダー株式会社
藤咲英史 みなとみらいプロジェクト実行委員長
大川恵介 大川商店
黒澤仁晶 MMM2014審査員賞受賞作家

みなとメディアミュージアム

website <http://minato-media-museum.com/>
E-mail minato.media.museum@gmail.com
Twitter @minatom_m

発行 みなとメディアミュージアム実行委員会
発行日 2017年11月5日
編集 中村泰之 橋口静思 浅野嶺 高田彩加
写真 山本大樹 サユリニシヤマ 船越知弘
デザイン 中村泰之

印刷 株式会社グラフィック

